「長崎」の訴えを受けて

多摩市立諏訪中学校　３年　戸ノ部　来実

今回多摩市子ども被爆地派遣事業に参加して、平和に対する考えが広がり、自分から平和と向き合っていくことが出来ました。それまでの私は、学校内の授業でしか戦争や原爆について考えることがなく、「日本は非核の国だから平和だ」と固定観念にとらわれ、過去と向き合うこと、それも残酷で苦しい過去について理解をする経験がありませんでした。ですが、派遣員として平和事業に参加して、私の意識が大きく変わり、原爆の恐ろしさを痛感したのと共に、改めて平和は非常に尊く一人ひとりが築いていかなければならないのだと考えました。それは戦後 78 年、今もなお平和を訴え原爆の影響に苦しみ続ける長崎の人々や場所などに耳を傾けて得られた考えでした。

特に「この子を残して」という映画を鑑賞した際、映画を観る前と観た後では、自分自身が今まで持っていた原爆のイメージや人々の思いなど、全く違うのもので、私の考えていたものと比にならない程の苦しみや辛さを味わっていたのだと思いました。主人公とされる長崎で被爆した永井隆医学博士の生い立ちや、当時の行動、未来へ遺した思いを重ねることで、更に深く、大切なものを受け取りました。観た直後は、頭で分解することが難しく圧倒されるばかりでしたが、少しずつ時間をかけて汲み取っていくことで、様々な事を捉えられました。

それは、つい先程まで一緒にいた人が、見ていた光景が、一瞬で奪われる残酷さや、そこら中に亡くなった人や真っ黒焦げになってしまった人がいる状態が「普通」となっていた事などです。更に、被爆を経て未来へ平和を訴える人々の気持ちはとても強く、筋の通っているものだと心に刺さりました。

「長崎で原爆投下は最後」「二度とそんな悲劇は起こさない」その思いは過去も今も同様であります。したがって私はそう願うだけでなく、未来を担う私たちが小さな事からでも行動すべきだと考えを広げる事ができました。

「日本は非核の国」そう思い平和について考える事がなかった私ですが、世界に目を向けて戦争や紛争が絶えず、国同士の対立も数多く発生していると思った事から、「日本だけが平和で安心・安全であっても意味がない」と考えました。平和とは、日本はもちろん、世界での実現も含めたもの。そう長崎の人々や地も訴えているのではないのだろうかと考えます。だからこそ、「日常から平和を」その意識を持った上で、一人ひとりが平和を築いていかなければならないのだと感じました。平和を家族や友達、自分自身と関わって深める、歴史を知ってみる、政治と結びつけるなど、一歩ずつ平和へ歩み寄る事で、実現が目に見えてくるのではないかと考えます。

長崎が叫ぶ平和への訴えを受け取ってこそ、私の持つ考えが変わったと思い、また今度は今を生きる私たちが、平和を築き、後世へ伝え抜く、それこそが私たちが全うすべき使命なのだと感じました。